Japanese Association of Educational Psychology

から研究していきたいと答えた。また岡田(東大)の常同的行動が，1日の時間によつても影響されるのではないかという質問に対して，篠崎は Kaufman らの研究結果を紹介して，常同的行動の水準が1日の時間によつて変動したが，彼らはそれを対人的関係の面から解釈していると述べた。さらに，岡田，伊藤は，時間を考慮して常同的行動を研究すべきではないかということを指摘したが，篠崎は，単に時間というよりも，object や対人的関係あるいは疲労度などの因子を摘出した研究を行ないたいと反駁した。また，岡田は精薄児にみられる常同的行動を如何に解釈するかという本質的な問題に触れたが，間接的に，篠崎は，精薄児の常同的行動には，二つの特徴的な型があり，autistic と Non autistc のものがあるのではないかと述べた。

山田，大友の研究は，いずれも鈴木ビネー法による精薄者の知能に関するものであつたが，伊藤は，両者の研究結果の、くい違いをどう解釈するか問うたが，これに対して山田は，一方が MA を基準とした研究であるのに対して，他方は CA を基準とした研究であり，いわゆる立場の相違にもよるのであろうと答え，大友もこれに同意した。しかしまた大友は，養護学校の小学部に属する小頭症で IQ 65 を示していたものが，2年目に普通学校へ転校した例を上げ，知能テストの結果に疑問を抱いた経験を語り，さらに伊藤は，結局はビネーテストの精薄児に対する適用性に限界があるのではないかと問題を投げかけた。これに対して，山田は，精薄児の知能テストの施行法を研究することに意義があることを述べた。

(野村勝彦・篠崎久五)

10—5 特殊教育

1051—1054 精神薄弱児の治療教育の研究

(1) 原理と方法

(2) 自己活動の発達

(3) 対人的活動の発達

(4) 個人差の教育効果

①津 守 真(お茶の水女子大学)

②西 山 恭 子(日本総合愛育研究所)

③堤 順 子(〃)

④川 島 杜紀子(〃)

小 林 節 子(お茶の水女子大学)

1055 狩野式オゼレッキーテストに現われた精神薄弱児の運動能力の発達

○菅 田 洋一郎(京都学芸大学)

1056 精神薄弱児の教育心理学的研究 7

算数文章題解決過程の考察

○織 田 隆(京都学芸大学)

来 栖 淳 郎(〃)

四 方 実 一(〃)

菅 田 洋一郎(〃)

山 内 郁(〃)

部会の全体的特徴

本部会は，日曜の午前であつたが，約30名ばかり集り，討論の時間は約1時間あつたが，熱心に討論され，時間が足りないほどであつた。本部会の研究報告は，愛育研究所における精薄幼児の研究が4つと，京都学芸大の精薄児の教育心理学的研究が2つと，大きくわけて2つの種類の研究から成る。討論は，前者により多くの時間が費やされた。

討議の内容

精薄幼児の研究について

ここで最初に問題となつたことは，治療教育の概念についてであり，最後までくりかえし問題とされた。守屋(立命館大)より発題的発言があり，つづいて，医学における治療の概念について発言があつた。本研究当事者の側より，津守が説明した。ここで治療教育とは，治療機能と教育機能の両者をふくむものであり，治療機能は，子供が自己活動によつて自発的に活動を展開できるような状態にまでもつてゆくことであり，教育機能は，さらに，社会的に望まれる方向に導く方向性をもつた機能である。これに対し，治療教育というと，精薄を治療するという意味にもとれるという疑義があり，報告者はそのような意味は少しもないことを明らかにした。

また，治療教育は，特殊教育と同義であるのか，あるいは，一般特殊教育の場の中で部分的に行なわれるものであるのかという問題が提出された。報告者としては，幼児の段階では，一般に，教育機能のみでは不十分であり，むしろ治療機能が優先するものであると考える。

その他，家庭教育，親の教育，教師の子どもに対する意識，正常幼児と精薄幼児の類似点，相異点などの問題

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

が論ぜられた。

京都学芸大の精薄児の教育心理学的研究については，2，3の技術的問題について討論され，今後の研究に期待するところの大きいことが述べられた。

（津守　真，菅田洋一郎）

10—6　特殊教育

1061　ろう児の擬態語について

古田　倭文男（東北大学）

1062　ろう学校児童生徒における語彙の実験的研究

石井　武士（福岡学芸大学）

1063　読話成績とスピーチの繰り返しについて

○中野善達（東京教育大学）
渋江孝夫（同附属桐ヶ丘養護学校）

1064　無意単音節の読話明瞭度と発語の口型について

○尾島　碩心（東京教育大学）
中野善達（　〃　）

1065　各種の難聴条件における最適朗読速度とその時間知覚判断について

新谷　守（東北大学）

1066　高度難聴条件下での物語聴取における推理過程について

佐藤昭一（東北大学）

部会の全体的特徴

本部会の発表論文全部が聴力障害（聾4，難聴2）に関するものであり，しかも全部が言語に関するものであつたため，内容に関して極めて等質的な部会であつたといえよう。発表者の所属は東北大学3，東京教育大学2，福岡学芸大学1であつた。参会者は発表者も含めて14名で盛会とはいえないが，小ぢんまりとしていた。発表者以外の参会者も全部同じ専攻の人々であつたので，内輪同志のうちとけた討議も行なわれた代り，専攻の異なる隣接領域の研究者達の活発な意見というものは聞くことができなかつた。

討議の内容

古田（1061）の研究は，Usnadze にはじまる無意味綴りと無意味図形の照応の実験を利用して，ろう児における擬態語の phonetic symbolism の側面を明かにしようとしたものであつて，ろう者の発音があいまいなために，図形の選択が広く分布するという仮説が実証されたとしている。これに対して佐藤（東北大）より，それはろう児が正常児と異なるということが明らかになつただけで，あいまいな発音をするためにということはまだ十分実証されていないのではないかと指摘された。又中野（東教大）は，ろう児の選択にはたしかに Variety があるが，われわれからみてもつともらしいと思われる図形も選択しているのかを問題とし，佐藤も，ろう児の選択の方がかえつて特定の図形に集中し，正常児の選択の方が広く分布するような無意味綴りはなかつたかを問題とした。結局印刷して示された無意味綴りを，ろう児と正常児が視覚的印象としてとらえたのか，発語運動の covert な kinesthesis があつたのかということが問題になろう。

石井（1062）の研究は，従来の方法とことなつて，有意味語と，それと同数の音韻的に等価の無意味綴りともランダムに混合し，それに反応させることによつて，有意味語と誤認されたため既知とされた無意味綴り（発表者の所謂負の語彙）の数をも測定し，聾学校生徒の語彙数が高等部2～3年で小学校2年に及ばず，かつ無意味綴りに既知判断をするものの多いことを示したものである。これに対して，(1)ろう児が既知としてえらんだ無意味綴りは，どういう意味のものとしてえらんだのか如何なる手段でたしかめたか，(2)またなぜ有意味語とまちがえたのか〔荒川（東京教育大学）〕，(3)無意味か否か何で判定したか（中野），(4)ほんとうに知つていたというチェックはどうしたのか〔小川（国立聴力言語障害センター）〕等の質問が出された。(1)，(4)については選択された語も含む短文を作らせることによるとし，(2)は一部は読み誤りによるとし，(4)は「辞海」を参照したと答弁があつた。

中野ら（1063）の研究は読話における送話のくりかえしと読話成績の関係を検討したものであるが，この発表に対しては格別質疑が提出されなかつた。

NII-Electronic Library Service